

出で、かつ故人の幼な友だちでもある村田はまが列席。(昭和33年5月21日付「毎日」「産経」各県版)

8月・「文芸春秋」8月号グラビアの「こどものうた」は、童謡「露地の細路」のイメージによる写真に、歌詞1、2節をそえる。

▼昭和36年(1961)

静岡市曲金にある母校、現静岡市立西豊田小学校に童謡碑が建立され、同校開校記念日の11月4日除幕式が挙げられた。碑は淡い青緑色の伊予自然石で、碑面には同校出身の書家西河実の筆で「背くらべ」の歌詞1、2節が刻まれている。(カラー写真及び扉写真参照)

碑建立は、前記音楽法要の年に計画され、野原校長に引継がれ、同校児童会の廃品回収による資金調達(13万余円)をもとにPTA建設委員会が推進、開校85周年記念の行事という文字通り学校ぐるみの運動がみられた。除幕式には静岡市長、教育委員長も列席、故人の親戚に当る海野晋吉が、海野家を中心とする「曲金懐古談」を講演している。

▼昭和37年(1962)

月刊「芸術生活」第71号(昭和37年6月号)に、同誌のシリーズもの「この人の足跡」(2)として「五月になるとわが歌が——海野厚の情熱と挫折——」が載る。筆者は文末に「文・後八郎」となっているが、若い頃の草柳大蔵である。草柳は資料を海野晋吉、弟欣也、春樹に面接、取材した。

▼昭和42年(1967)

12月5日付毎日新聞県版「明治百年静岡県の歩み」(107)は、「文学」に故人をとりあげ、「日本人すべてがうたい、成長してきた歌『せいくらべ』、おもちゃのマーチ』『露地の細路』『月夜の畑』の天才作詩者」として、その文筆の生涯を略述し、中学の同窓生福地省吾、弟春樹、従弟井上幹一を取材した。井上の談話の中に下目黒時代の故人について、「いつもドテラを着てチョンチョン帽子をかぶり、ミソツ歯で、昼と夜の生活を転倒し、まるで人間離れしていた。結婚のことはトンと気にかけないようだったが、洋行したいとよく言っていた」という回想がある。

▼昭和43年(1968)

「曲水」595号(昭和43年6月号)が、「古き時代のよき作家たち」IIとして、「海野長頸子 青木よしを」を掲載(年譜大正5年9月の項に一部を引用)。この中に、加藤余石の追悼句。

長頸子兄の遺骨埋葬に侍りて

「かたばみを摘む子らと御霊涼しけれ」
が引用されている。

▼昭和45年(1970)

2月6日付読売新聞静岡版「ふるさとの歴史」(38)「人物その(5)」は、「不幸な文士生活『有名を極度にきらう』の見出しで故人をとりあげる。

3月5日付朝日新聞県版「歌を求めて」(3)は「せいくらべ」